現場レポート

# “農と食” 北の大地から

連載第34回

## 「家畜の福祉と健康」をめぐる状況

ルポライター
滝川 康治

# 「家畜福祉」で初の国際基準を採択
# 問い直される「健康」や「飼育環境」

**家畜の健康や畜産物の安全性などの問題に取りくむ国際獣疫事務局（OIE・加盟167カ国・国際動物保健機関と改称）は5月下旬、家畜福祉に配慮した「輸送」と「屠殺」に関する初めての国際基準を採択した。今後は畜舎や飼育管理のガイドラインづくりを行なう予定であり、この議論が進められる過程で加工型畜産の道をひた走る「酪農王国・北海道」のあり方も転換が求められる。時代の節目を迎えたいま、乳牛を中心にした「家畜の健康と福祉」をめぐる状況をリポートする。**

### 「効率追求」の果てに増える〝尻尾のない牛〟

道内ではいま、〝尻尾のない乳牛〟が増えている。人間の都合で身体の一部を取り除いたもので、尻尾の付け根から二十センチほど残し、その先はない（畜産用語で「断尾」と呼ばれる処置。94頁の写真を参照）。昔は牛をこんなふうに扱わなかった。牛飼いの家庭で育ったわたしは、尻尾を落とされた異様な姿の牛たちを見るたびにおぞましく感じ、悲憤慷慨（ひふんこうがい）する。

断尾のやり方はこうだ――。一種の輪ゴムを使って尻尾を締めつけ、半月から一カ月かけて腐らせ、落ちるのを待つ。「切り落とす」よりも残酷な話である。「破傷風になったりして、けっこう事故もある」（獣医師）。断尾の時期は初産の前後が多いようだ。

近年、省力化のために牛を繋留しないで飼う、「フリーストール方式」と呼ばれる大きな牛舎を導入する酪農家が増加傾向にある。道内の普及率は〇四年現在、全体の一五％に達した。

「通路や尿溝に尻尾がつくと汚れる」「ミルキングパーラーで搾乳するときに、人の体や牛乳が汚れる」などを理由に、この方式で牛を飼う酪農家を中心に断尾を行なう農場が多い。一種のブームのようにもなっており、深く考えずやってしまう人もいるようだ。ある酪農関係者は「フリーストール農家の牛には八割方、尻尾がない」と複雑な表情を見せる。いずれにせよ、生産性や効率ばかり追求し、人間の都合を優先させた行為と言わざるをえない。

知己のある老酪農家は、後継者たちが平気で断尾をすることに対し、「あいつらには動物愛護のかけらもない」と吐き捨てた。別の繋ぎ飼いの酪農家は、尻尾が汚れるときれいに洗い、それから乳を搾る。断尾に嫌悪感を示す、こうした健全な感覚の持ち主も多い。

一般の消費者やマスコミ関係者は〝尻尾のない牛〟を取り巻く実態をよく知らずにいる。

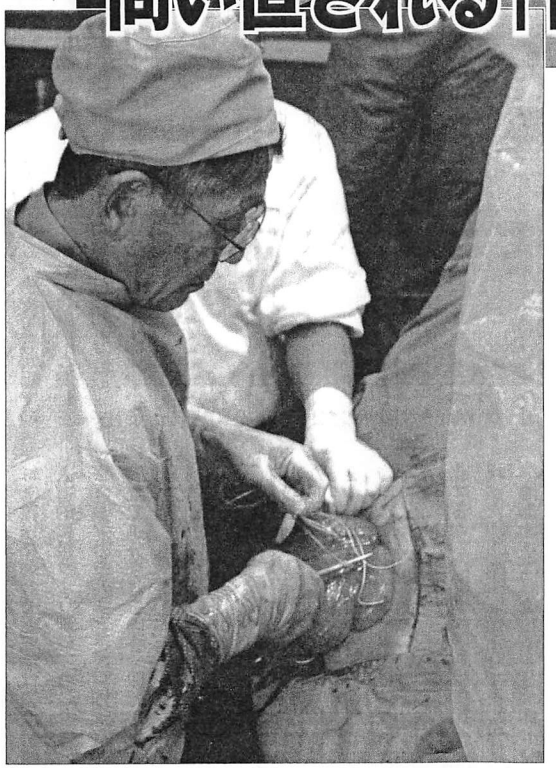
### 90年代に基準を提案 確立した「5つの自由」

以前、良質の牛乳生産をめざす十勝の牧場がUHBのニュース番組で紹介されたとき、そこの牛たちはすべて断尾してあった。が、リポーターは尻尾を切ることが優れた飼い方であるかのように伝えていた。

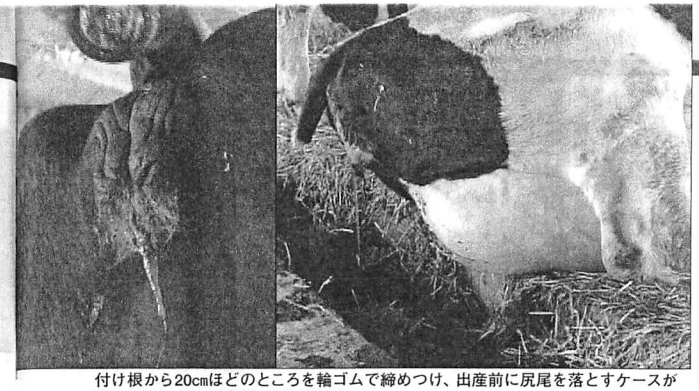
番組を見たわたしは無性に腹が立った。尻尾を落とし、衛生管理に努めることで、きれいな牛乳や乳製品を生産することはできる。しかし、それは「良質」や「安全」の物差しが狂っているし、牛や人間にとって決して健全な姿とは言えない。たとえ良質の製品ができたとしても、自分はそれを口にしたくはないなあ――と。読者のみなさんは、こうした〝尻尾のない牛〟の存在をどう受け止めるだろうか。

冒頭で「断尾」の話を紹介したのは、家畜の健康や福祉についての認識が浸透したヨーロッパでは尻尾のない牛は見かけない、と聞くからでもある。

日本ではなじみの薄い「家畜福祉」について、世界に先駆けて百年ほど前に『動物保護法』を制定したイギリスを中心に「動物の苦痛の除去」と「虐待防止」を柱にした運動が行なわれてきた歴史



「家畜福祉」をめぐる初の国際基準の採択を前に民間団体が企画した「緊急ワークショップ」。健康や福祉を視野に入れた実践例も紹介された（写真右）。4月24日、東京のJAビルで。多発する乳牛の生産病のひとつ「第四胃変位」の手術。粗飼料が少なく、運動不足の牛が罹りやすい（写真下）



付け根から20cmほどのところを輪ゴムで締めつけ、出産前に尻尾を落とすケースが多い。左は断尾の直後で傷口が生々しい

がある。それらを踏まえ九〇年代前半、同国で基準原則が提起された。

そして現在、家畜福祉をめぐる世界的な共通認識として、次の「五つの自由」が確立している。

**①飢えと渇きからの自由（十分な給餌や給水）**

**②不快からの自由（飼育環境の向上）**

**③痛み、傷、病気からの自由（ケガや病気などの手当て）**

**④通常行動への自由（動物の習性や生態にかなった飼育）**

**⑤恐怖や悲しみからの自由（心身のストレスからの解放）**

つまり、家畜の健康と福祉を実現するには、こうした自由が保証されなければならないわけだ（前出の断尾は③④に抵触するし、イギリスの法律では断尾を含む多くの切断処置を禁止している）。九七年にはEU（欧州連合）のアムステルダム条約特別議定書で、「家畜は単なる農産物ではなく、感受性のある生命存在」と定義された。

日本獣医畜産大教授で「農業と動物福祉の研究会」代表の松木洋一さん（3月号のインタビュー記事を参照）が、こうした流れの背景を解説する。

「二つの基本認識は、動物には苦痛とストレスを感受する能力があり、ストレスによって健康を害し、病気に感染するメカニズムが存在する、という科学的な根拠に基づいている。とくに家畜は人間の食料や衣服、薬などに利用されているため、家畜の健康と福祉の水準は食料の安全性や品質の向上と密接に結びつく。最近のBSE（狂牛病）や鳥インフルエンザなど人獣共通感染症の発生は、まさに動物の健康が害され、病気に感染した結果が人間の健康危害にも影響を及ぼしている」

「家畜福祉」は動物の健康なしには実現できないし、食の安全性や品質のありようともつながりが深い――と考えると理解しやすいだろう。

## OIEが初の国際基準 次は飼育環境の議論へ

EUでは、七〇年代から法令の整備が行なわれており、すでに養鶏場でのケージ（鳥かご）飼いの段階的な廃止をはじめ、繁殖用雌豚に仕切りを設けて身動きができないストール飼いや、子牛の繋ぎ飼いの原則禁止などの保護基準などが定められた。こうした経緯を受け、家畜の福祉や畜産物の安全性の問題などに取りくむOIE（国際獣疫事務局、国際動物保健機関）の〇四年総会には、動物福祉の国際基準原案が提案され、日本を含む加盟百六十七カ国が一年間かけて検討してきた。

そして、五月下旬にパリで開かれたOIE総会では、家畜福祉に配慮した「輸送」と「屠殺」に関する、初めての国際基準が採択された。東京の民間団体・地球生物会議（野上ふさ子代表・会員約2000人）のホームページ［www.alive-net.net/］には、この基準に対する世界動物保護協会のコメントが載った。そこでは、とくに重要な基準として次の四つを挙げている。

**①畜産動物の輸送中、楽に横たわり、自然に立つことができる**

**②輸送時には、苦痛を与える手順や不適当な刺激、先のとがった棒などの道具は用いるべきでない**

**③輸送に関わる運転手は畜産動物を人道的に扱うよう訓練すること**

**④鳥インフルエンザや口蹄疫などの病気で処分される場合、即死するような方法を用い、不安や極度の疲労、苦痛を与えないようにする**

加盟各国は今後、この基準に沿った輸送や屠殺のやり方を実践しなければならない。今回の基準は第一段階にすぎず、OIEは今秋から、畜舎と飼育管理のガイドラインづくりに本格着手する予定。この第二段階の議論が具体化するなかで、効率一辺倒で風土を軽視した加工型畜産に走り「安い畜産物」を作ることに偏重してきた、日本の畜産のあり方が大きな転換を求められる場面も出てきそうだ。

が、日本国内では「家畜福祉」についてなじみが薄いばかりか、政府の対応も後手に回っている。

農水省は今年四月、家畜商や学識経験者、生産者・動物保護団体の代表、食肉市場関係者六人に委員を委嘱し、遅ればせながら「家畜福祉に配慮した家畜の取り扱いに関する検討会」を発足させた。しかし、会議の開催予定は年間わずか一～二回と少なく、屠殺をめぐる議論にもかかわらず所管の厚生労働省が事務局に入っていない――などと消極的であり、問題点が多い。

「酪農・畜産王国」を誇ってきた北海道に至っては、「庁内で家畜福祉についての検討や議論はなされていない」（道農政部の幹部）のが実態である。遺伝子組み換え作物の規制条例や道産食品の認証システム、有機農業の推進など消費者を意識した積極的な施策はあるが、生産システムを点検し、家畜の健康や福祉のあり方から「農と食」を問い直す作業は手つかずのままになっている。これでは話にならない。

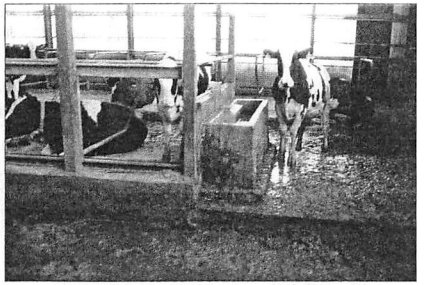
北海道の酪農家では放牧牛のほうが少数派。見学に訪れた若者たちの表情が生き生きしている（下川町内で）

## 土から離れ酷使される牛たちに生産病が多発

「酪農王国・北海道」の現場に戻ろう。

家畜福祉の原則のなかに、「痛み、傷、病気からの自由」がある。現実には、牛に「痛み」を強いる断尾を行なったり、「ミネラルウォーターより安い牛乳」を大量に消費者へ届けるために、牛の寿命を縮めて酷使し、さまざまな「生産病」を発生させてきた。

わたしが子どものころは六～七産する牛が珍しくなく、わが家で一番長命な牛は十五歳くらいまで飼われていた。いまでは、生後二十四カ月前後で分娩したあと、年齢五～六歳、平均二・五回ほど出産しただけで屠場に送られ、食肉などにされる。〝牛乳製造装置〟として酷使されるので体がボロボロになり、人間でいえば三十代くらいの若さで用済みになっている。



各地で増えているフリーストール牛舎の一例。床が泥濘化しやすく、蹄の病気が多くなる

初産後、牛舎から一歩も外に出してもらえない牛も多い。そうした牛たちは、地面に生えた草を直接食べることなく一生を終える。かくして経営規模を拡大し、泌乳量が多くなるとともに、乳房炎や繁殖障害、脂肪肝など、さまざまな生産病が増えてきた。

酪農家にとってはポピュラーだが消費者には耳慣れない「第四胃変位」という消化器病がある。

反芻（はんすう）動物の牛には胃が四つあり、それぞれの役割を果たしている。一番最後にある「第四胃」が本来の位置からずれてしまうことで、食欲がなくなり、糞や乳量が減るなどの症状を示す病気。分娩後三～六週間に発生しやすく、与える粗飼料が少なく、運動不足の牛に多発する傾向がある。

長いあいだ家畜診療に携わってきた、根室管内の獣医師がこう説明する。

「自分の学生時代には習わなかった病気であり、高泌乳を求めるようになった七〇年代後半から第四胃変位に罹る牛が増えてきた。放牧主体のところではあまり発生せず、乳量が多い地区ほど発生率が高い。管内ではいま、年間十万頭が分娩し、うち四千頭（4％）が第四胃変位の手術を受けます」

わたしも何度か現場に立ち会った経験があるが、開腹手術としては短時間のうちに終わる。牛にはストレスがかかるが、飼い主はそう深刻に考えないし、手術件数が多いので診療機関にはドル箱的な病気になっているらしい。

現代酪農の歪みを象徴する話である。

言葉は「自由（フリー）」、繋がれた状態でないので、フリーストール牛舎を見て、「牛

「若い世代と生産現場をつなぐ試みが大事」と話す地球生物会議の野上ふさ子代表

が自由に歩け、家畜福祉にかなっているのでは…」と感じる消費者もいるはずだ。が、実態はそうでない。

この方式を導入した知己の酪農家は、「フリーといっても密閉型。サルモネラなどの病気は繋ぎ牛舎より速く伝わり、『本当に衛生的か』というと違う。この方式でやっている農家の配合飼料の与え方は肉牛以上で、飼料全体の五割近いところが多い」と話す。通路が糞と尿でドロドロになり、蹄の病気にも罹りやすい。

その配合飼料の主原料は外国産の穀物で、搾乳期間中は毎日十キロほど(多い農場は15キロ前後)食べさせる。地球上に飢えで苦しむ人たちが大勢いるというのに、人間が食べられる穀物を草食獣の牛に大量に与える。そして、生産病を多発させ、牛の寿命を縮めて家畜福祉をないがしろにする――こんな負の連鎖を断ち切らない限り、健全な畜産は取り戻せないのではないか。

## 議論は始まったばかり 現場を訪れて考えよう

OIE総会での国際基準の採択を前にした四月下旬、この問題をめぐる緊急ワークショップが東京都内で開かれた(主催は農業と動物福祉の研究会)。

パネルディスカッションのなかでは、宗谷岬肉牛牧場や先月号で紹介した富士山麓での放牧豚牧場などの現場報告もあった。鶏関連の事業を手広く営む㈱イシイ社長の竹内正博さんは、「環境保全と動物福祉を考え、人と動物の生活をより良くすることを経営理念に掲げている」と報告。有機鶏肉や有機ペットフードの生産や、飼育設備と鶏の状態についてのデータ収集、薬に頼らない元気な雛やブロイラーのウエートを高めていく事業目標を紹介した。

実践例はまだ少ないが、各地で家畜福祉を視野に入れた試みが始まっていると実感できた。全体討論のなかでは、「お客さんに豚の写真を見せることで、動物が健康に育っていることを理解して豚肉を買ってくれる消費者がいる。動物福祉をアピールしていけば伝わるし、消費者がその価値を認めれば(高くなりがちな)コストの吸収もできていくのではないか」(商社マン)

「イギリスでは放牧された豚が元気そうにしていた。古い人でも放牧養豚を初めて二十年くらいで、常に研究しながらやっている」(大学の研究者)

などと、消費者の理解や独自の飼育技術の開発が大事という声が多かった。

「日本は仏教倫理に基づく殺生禁止の歴史が長く、戦後までの千二百七十年間、動物への配慮を法的に規制してきた。しかし、それは『動物福祉』とは違っていた。農耕が盛んな日本では、畜産動物との関係は『使役』だけで、殺生禁止は慰霊の発想。直接飼わないから動物への共感が育たなかったし、動物愛護がペットに集中してきたのは、そうした理由があったからです」

と指摘した東北大学大学院農学研究科教授の佐藤衆介さんは、「日本型の家畜福祉を創造しよう」と呼びかけた。

家畜福祉をめぐる議論は始まったばかりであり、現場まで浸透するには時間がかかる。肉食を減らし、伝統料理を工夫して作り、畜産農家などを見学することを薦めてきた「地球生物会議」代表の野上さんは、こう提言する。

「消費欲が衰え、少子化社会になって日本の社会が曲がり角にきているなかで、新しい生産のあり方を考える時代を迎えたのではないか。一番いいのは都会の人が現場に出かけて体験すること。概念ではなく、自然のなかに入って学ぶといいでしょう」

「動物の問題に関心を抱く人は若い世代とくに女性に多く、パネル展を企画するとよく見にきてくれる。『動物福祉』と『環境保全』をキーワードにNPOを創り、若い世代と生産現場をつなぐ試みが大事です。動物が幸せに生きているのは、人間にとっても幸せな証。生産者も情報を積極的に勉強し、(家畜が)ストレスを解消すると生産性も上がることを分かってほしい」

国際基準の採択は、多くの人が「家畜福祉」を考える好機になるはずだ。消費者は家畜が生活するところを、生産者は畜産物を食卓に載せる人たちの思いを知らなさすぎる。「家畜の健康と福祉」を切り口に、お互いの現場を訪れて「見る・聞く・語る」ことで新しい時代を創ってほしいものだ。